

第38回OYO展に参加して



川合 克実
KAWAI Katsumi

日本ゼネスパイプ(株)
本誌編集企画小委員

平成23年10月13日・14日に、秋葉原UDXギャラリーにて「巨大地震の脅威に備える」をテーマに第38回OYO展が開催されました。

今回のOYO展では、今後も巨大地震の発生が懸念されるなか、地震や防災関連に特化した技術や製品が紹介されており、私は、13日の午後から会場を訪れることができました。

未曾有の被害をもたらした東日本大震災から7ヶ月が過ぎましたが、会場は多くの来場者で混雑しており、地震に対する人々の関心が非常に高いことがよく分かりました。

展示会場では、「巨大地震の脅威」「総力をあげてトータルサポート」「液状化を予測する技術」「災害発生後の復旧・復興を支援する技術」「将来の地震を予測する技術」の各テーマに基づいて、パネルや各種の測定機器が展示されていました。
(写真-1)



写真-1

私は、先ず展示内容について、非常に分かりやすく一通りの説明を受けることができました。私達が普段見ることのできない地中や海底を調査する技術とその成果のレベルの高さには驚きです。今までの調査は、工事のための調査が主であったようですが、現在は防災や環境のための調査になってきているようです。



写真-2

今回の目玉は、「液状化ポテンシャルサウンディング(PDC)」という新しい調査技術で、従来より速く、低コストで地盤情報が得られるものです。(写真-2)

この技術により、土質の判別、地耐力の評価、液状化の判定などが効率的に行え、ボーリング調査や室内土質試験より低価格で調査を行うことができます。

精度があって低コストな液状化調査法の開発が急務となっている今、頼もしい存在になりそうです。

次に、「首都圏を襲った液状化—地盤からみた液状化被害とその対策—」のセミナーに参加しました。

特に液状化被害に関するセミナーは、関心が高かつ

たようで会場は満席でした。(写真-3)

このセミナーでは、東日本を襲ったM9.0の地震で首都圏において想定外と言える液状化被害が発生し、被害の多くは戸建住宅とライフラインでしたが、液状化が地表面付近に影響を及ぼした現象は、噴水・噴砂、クラック、不同沈下で、被害は広範囲にわたりました。この想定外の被害を基に、地盤からみた液状化の備え、対策、そのための調査技術について講演が行われました。地下埋設物が受けた液状化による被害は、開削工法によって埋め戻された箇所が多かったようです。今後、調査結果を基に液状化に効果があった工法が公表されていくのでしょうか。

私は、非開削工法がどれだけ液状化被害を軽減したかを計り知ることができないので残念ですが、これからは、安全・安心な工法として、非開削工法がもっと見直されても良いような気がしたのと同時に、展示会の内容の高さに感心しながら会場を後にしました。



写真-3